

# 『源氏物語』における「ぞぞろ寒」

——光源氏の繁榮——

相 原 咲清香

はじめに

野分だちて、にはかに肌寒き夕暮のほど、常よりも思し出づること多くて、朝負命婦といふを遣はず。(一一〇二頁)

右は、桐壺巻、野分の段における、有名な冒頭部分である。亡き人を今こそ必要であると感じる時、人は、最も強く喪失感を抱くのではないだろうか。桐壺帝の場合、常に側においていた更衣を失ったことを、改めて痛感したのは、野分の吹いた夕暮れであった。それには、急に「肌寒」くなったことが大きく関係しているよう。「常よりも」とあるのは、観念的に更衣を思い出しているというのではなく、「肌寒」いことが更衣の温もりを求める気持ちへとつながっていることを示しているよう。それは、野分の段の直前に「御方々の御宿直なども絶えてしまはず」とあることから推察できる。持って行き場のない喪失感を抱えて、帝は、更衣の母に遣いをやる。遣わされた朝負命部の帰りが、次のような描写がある。

月は入り方の、空清う澄みわたれるに、風いと涼しくなりて、草むらの虫の声々もよほし顔なるも、いと立ち離れにくき草のもとなり。(一一〇八頁)

先の場面で帝に「肌寒」さをもたらしたのは野分であった。ここでは、風は「涼しく」なって吹いている。野分に比べ、おだやかで、寒さのやわらいだ風であろう。帝の使いが弔問したことで、いくらか母の心が慰められたことを象徴していると考えられる。

また、帯木巻において、源氏は「暑き」と顔をしかめ、涼を求めて左大臣邸から紀伊守邸に方違えする。

風涼しくて、そこはかとなき虫の声々聞こえ、蛩しげく飛びまがひて、をかしきほどなり。(一一六九〜一七〇頁)

右の如く「暑き」所から移った後の紀伊守邸の描写の中に「風涼しくて」とあり、この夜源氏は空蟬に出逢うのである。椎本巻で薫が大君を垣間見るのも「暑さ」を逃れて涼しい宇治へ赴いた折である。

このように、『源氏物語』の重要な場面には、何らかの形で「風」とそれにまつわる寒暖の感覚が働いている。

『源氏物語』研究において、身体論・感覚論が脚光を浴びている昨今である。その中で、視覚・聴覚・嗅覚への言及は比較的多く見られるものの<sup>1)</sup>、寒暖の感覚については、ほとんど論じられていない。

一見、人物の主體的な感覚でないと受け止められているためかと思われるが、しかし、実のところ『源氏物語』の中で、寒暖の感覚は登場人物の心情のみならず、物語展開と密着に結び付き、読者が作

品世界を円滑に享受できるように促し、物語を生き生きしたものにさせる働きを担っている。

今回は、「そぞろ寒し」について言及する。『源氏物語』における寒の感覚には、先に挙げた「涼し」をはじめとして、「肌寒し」「冷やかなり」「寒し」がある。

「肌寒し」は、桐壺帝、玉鬘、落葉宮が感じる感覚となっている。桐壺帝並びに落葉宮の場合、愛する人を亡くした喪失感を強く感じる場面で、玉鬘の場合は、筑紫から父だけを頼りに上京したものである。あてもなく、不安にかられる場面で「肌寒い風が吹くのである。

「冷やかなり」は、正篇では、源氏、紫上、夕霧が、恋愛に関する切ない気持ちと共に感じている。紫上は、女三宮降嫁の夜、源氏を想う折、夕霧は、紫上に対しての思慕を抱いた時に「冷やかなり」を体感する。一方、源氏は、独りの特定の女性ではなく、夕顔、藤壺、六条御息所、について「冷やかなり」を感じている。いずれも、相手の事を想って切ない気持ちを抱きながら、逢えないことを余儀なくされる場面である。「肌寒し」と「冷やかなり」を感じる人物の重なりはないことから、登場人物や状況による使い分けがあることが確認できる。

「寒し」は、末摘花の貧しい様子を象徴しており、源氏が見かねて世話をする際に使用されている。『うつほ物語』において「寒し」が男女の恋愛に関して使われている場合とは、違っているわけである。むしろ、先に挙げた「肌寒し」「冷やかなり」の方が、『うつほ物語』

の「寒し」の使われ方に近いものとなっているのは興味深い。

以上が、主に恋愛に関して用いられていたのに対し、「そぞろ寒し」は、趣を異にする。正篇に六例、宿木巻に一例ある「そぞろ寒し」を順に考察していきたい。なお、引用は、『日本古典文学全集』『源氏物語』一―六（小学館）により、巻数とページ数を付記した（先の引用文についても同じ）。傍線はすべて筆者による。

#### 一 正篇における「そぞろ寒し」

「そぞろ寒し」が初出する帚木巻の例は、左馬頭が語った、指喰い女の話に出てくる。

臨時の祭の調楽に夜更けて、いみじう霰降る夜、これかれまかりあかるる所にて、思ひめぐらせば、なほ家路と思はむ方はまたなかりけり。内裏わたりの旅寝すさまじかるべく、気色ばめるあたりはそぞろ寒くやと思つたまへられしかば、いかが思へると気色も見がてら、雪をうち払ひつつ、

（一一一五〇―一一五一頁）

ここでは、左馬頭が一人寝の女を「そぞろ寒し」であろうと推測している。この場面には霰・雪が降っている。季節は冬である。

紅葉賀巻では、源氏が青海波を舞う。

木高き紅葉の蔭に、四十人の垣代、いひ知らず吹き立てたる物の音どもにあひたる松風、まことの深山おろしと聞こえて吹きまよひ、色々に散りかふ木の葉の中より、青海波のかかやき出

でたるさま、いと恐ろしきまで見ゆ。かざしの紅葉いたう散りすぎて、顔のほひにけおされたる心地すれば、御前なる菊を折りて、左大将さしかへたまふ。日暮れかかるほどに、気色ばかりうちしくれて、空の気色さへ見知り顔なるに、さるいみじき姿に、菊の色々うつろひ、えならぬをかざして、今日はまたなき手を尽くしたる、入り綾のほど、そぞろ寒く、この世の事ともおぼえず。もの見知るまじき下人などの、木のもと岩がくれ、山の木の葉に埋もれたるさへ、すこしものの心知るは涙落しけり。

(一一三八六〜三八七頁)

源氏が技を尽くして舞う青海波は、素晴らしかった。神がかった源氏の舞に、鳥肌が立つような感動を、人々は覚えたのである。

次に挙げるのは、葵上の死後、源氏が内裏へ参内するため、左大臣邸を去るシーンである。

御車さし出でて、御前など参り集まるほど、をり知り顔なる時雨うちそそきて、木の葉さそふ風あわたたしう吹きはらひたるに、御前にさぶらふ人々、ものいと心細くて、すこし隙ありつる袖ども湿ひわたりぬ。

(葵・二一五四頁)

「……ただ日ごろに添て恋しさのたへがたきと、この大将の君の、今はと他人になりたまはむなん、飽かずいみじく思ひたまへらるる。(中略)」と、御声もえ忍びあへたまはず泣いたまふに、御前なるおとなおとなしき人など、いと悲しくて、さとうち泣きたる、そぞろ寒き夕のけしきなり。

(二一五九頁)

先の引用は源氏が出立する前、後の引用は去った後のものである。左大臣の悲しみは、葵上を亡くしたことはもちろん、そのために源氏が他人になってしまふ、ということにも起因している。葵上の喪に服す間、左大臣家に居た源氏が、初めて余所へ出るこの日は、左大臣にとって決定的な日であった。源氏が次に左大臣家を訪れる時は、もう、左大臣家の婿ではないのだ。始めの引用中の傍線部に

見られる風景は、源氏が左大臣家から去る日の、人々の心象となっている。この日、左大臣は源氏に、

「……うちとけおはしますことははべらざりつれど、さりともつひにはと、あいな頼めしはべりつるを。げにこそ心細き夕にはべれ」

(二一五七頁)

と言っている。女房の中に源氏がこれきり訪ねて来ないだろうと嘆く者がいて、それを否定しきれず不安になるのである。もともと、葵上と円満だったわけではないので、葵上の死を機に、すっかり左大臣家から遠ざかつてしまうのでは、という見方も、もつともである。傍線を引いた「心細き夕へ」は「そぞろ寒き夕」と対応しているが、この「心細し」は、最初の引用中傍線部イを始めとして、この場面に出出している。「そぞろ寒き夕」とは、源氏が左大臣家の婿でなくなる日の、人々の心細さや悲しみを秋の季節の時雨混じりの「風景」と一体化させた表現であるといえよう。

これら三例の「そぞろ寒し」は、源氏以外の人に感じられるもので

あつたが、須磨巻には、源氏が「そぞろ寒し」と感じる例がある。

御墓は、道の草しげくなりて、分け入りたまふほどいと露けきに、月も雲隠れて、森の木立深く心すこし。帰り出でん方もなき心地して、拝みたまふに、ありし御面影さやかに見えたまへる、そぞろ寒きほどなり。 (二一七三〜一七四頁)

須磨に下る前に、源氏は桐壺院の墓参りに行く。その時、桐壺院の生前の姿がありありと現れ、源氏は「そぞろ寒し」という感を抱いている。季節は春である。

続いて、初音巻の例に移ろう。これは、男踏歌の場面である。冒頭に、

今年は男踏歌あり。内裏より朱雀院に参りて、次にこの院に参る。 (三一五二頁)

と語られるように、須磨から召還された源氏は勢いを取り戻し、今や要人として存在している。男踏歌の行列が内裏、朱雀院に続いて六条院へとやって来たことは、源氏の権力の大きさを示している。

影すさまじき暁月夜に、雪はやうやう降り積む。松風木高く吹きおろし、ものすさまじくもありぬべきほどに、青色の姿えはめるに、白襲の色あひ、何の飾かは見ゆる。かざしの綿は、にほひもなき物なれど、所がらにやおもしろく、心ゆき、命延ぶるほどなり。殿の中將の君、内の大殿の君たち、そこらにすぐれて、めやすく華やかなり。ほのほのと明けゆくに、雪やや散りてそぞろ寒きに、 (三一五二〜一五三頁)

ここでは「雪が「そぞろ寒き」という感覚を誘発している。「松風」が吹き下ろしてくる有様は「ものすさまじく」と形容されている。「松風」「かざし」は、紅葉賀の際にも見られた背景である。

住吉参詣の場合はどうであろうか。

十月中の十日なれば、(中略)波風の声に響きあひて、さる木高き松風に吹きたてたる笛の音も、外にて聞く調べには変りて身にしみ、琴にうち合はせたる拍子も、鼓を離れてとのへとりたる方、おどろおどろしからぬも、なまめかしくすうおもしろく、所がらはまして聞こえけり。(中略)かざしの花のいろいろは秋の草に異なるけぢめ分かれて何ごとにも目のみ紛ひいろふ。(中略)紅深き拍の袂のうちしぐれたるにけしきはかり濡れたる、松原をば忘れて、紅葉の散るに思ひわたさる。

(若菜下・四一六三〜一六四頁)

夜一夜遊び明かしたまふ。二十日の月遙かに澄みて、海的面おもしろく見えわたるに、霜のいとちたたくおきて、松原も色紛ひて、よろづのことそぞろ寒く、おもしろさもあはれざもたち添ひたり。 (四一六五頁)

「霜」が降りて、「よろづのことそぞろ寒く」となっている。「松風」と「かざし」が見られることは、先に挙げた二例と同様である。

\*

以上、正篇の「そぞろ寒し」をあげた。これら六例は、あえていえば、二つに分けることが出来よう。

帯木巻、葵巻、須磨巻の三例に共通する点は、亡くなった人が関

連しているのに加え、霰・時雨(涙)・露などに濡れている人が感じていることである。帯木巻における左馬頭の女は、霰の夜には生きていたが、会えないまま亡くなっている。それを回想して語る中に出てくるのであるから、死者と関係しているといえるであろう。また、葵巻では、葵上の死を悲しむというよりは、源氏が左大臣家の婿でなくなる事に重点が置かれていると受け取れるかもしれない。しかし、源氏が左大臣家の婿でなくなるのは、葵上が亡くなったからである。源氏が葵上の死後、初めて左大臣家を去るこの日、左大臣家の人々は改めて葵上が亡くなった悲しみを実感するであろう。

そう考えると、葵巻の例も、やはり、葵上の死が関連した「そぞろ寒し」なのである。もちろん、どのように「そぞろ寒く」感じているかという点では、それぞれ、違っている。帯木巻の左馬頭の場合は、人肌恋しさの「寒し」に通じる意味であろうし、葵巻では、かけがえない人を失った心細さや悲しみを抱えたなかで感じているのである。そして、須磨巻の源氏は、形勢が悪くなり、須磨に下向しなければならぬ中での墓参りであり、本来なら桐壺院の遺言によって、このような憂き目には遭わないはずであった。後に、桐壺院は、源氏の夢枕に立って、はつきりと語りかける。都の朱雀帝も桐壺院を夢に見て、遺言を違えたことを責められる。その時、源氏も朱雀院も「そぞろ寒し」という感を抱いていない。須磨下向前の墓参りの場面においては、桐壺院の姿は謎を含んで、源氏の前に映し出された

のである。

紅葉巻、初音巻、若菜下巻の例は、いずれも行事の描写の際に見られる。これらの共通点は、「松風」が吹いていること、「かさし」をつける催しであること、「恐ろし」ものすさまじ」「すこし」といった感情を抱かせる風景であること等である。その点は、須磨巻で源氏が「心すこし」という感を抱いていることと共通している。「そぞろ寒し」という感覚は、居合わせた人々が感じるもので、紅葉賀巻の例が顕著であるが、「この世のものとは思えない」という、神さびた光景を目の当たりにした感動を伴っている。人々は「そぞろ寒し」と感じるとき、日常とは異なる世界・心境にひたっているのである。ケではない、ハレの日の、特別な感覚である。

このように、全体を見渡してみると、最初に、死者に関連するものと、行事に関連するものとの二つに分けた、その区分も、必要なかったのかもしれないと思える。雪・時雨・霰・露・霜など、冷たい水気があり、それが「風」で打ちつけられることや、超越的な非日常の心情を描いた場面である、ということが全てに共通しているからである。

## 二 「そぞろ」と「すずろ」

——『紫式部日記』を参考に——

ところで、「そぞろ寒し」の「そぞろ」は、「すずろ」に通じるものと理解されている。『日本国語大辞典』によれば、「そぞろ」は、

その人の思い（認識・意識・願望・良識・思慮・分別・関心など）をはなれ、あるいは無視して、ある行為をしたり、ある状態になったりするさま。すずろ。

とある。『角川古語大辞典』には、

「すずろ」の転と見られるが、用いられる時代は遅れ、中世以後これが普通となる。意味も微妙に異なるところがある。と記述されている。

『源氏物語』には、五〇例の「すずろなり」がある（他に「すずろ」と「三例」、「すずろき」二例、「すずろはし」五例）。懸想に関するものが三一例を占めるが、注目したいのは、五例ある「すずろはし」のうち二例である。

何とも聞きわくまじきこのもかものしはふる人どもも、すずろはしくて浜風をひき歩く。（明石・二二二三〇頁）

は源氏の琴演奏に、

この御手づかひは、また、さま変りて、ゆるるかにおもしろく、聞く人ただならず、すずろはしきまで愛敬づきて、

（若菜下・四一—九二頁）

は紫上の箏の琴演奏に、人々が感動する様子で、「そぞろ寒し」の感動に通じるものである。

ちなみに、『紫式部日記』には、二例の「すずろなり」があり、齋院の中將の君と清少納言への批判文中に用いられている。また、一例ある「すずろ言」は道長の所作をさしている。「そぞろ寒き」一例は

若宮誕生の行幸の際に見られ、

いとよくはらはれたる遺水の、心地ゆきたるけしきして、池の水波たちさわぎ、そぞろ寒きに、うへの御相ただふたつ奉りたり。（岩波文庫『紫式部日記』三五—三六頁）

と、感動を伴った場面であることがわかる。同じ場面で左京の命婦が人に笑われる理由に「寒し」があげられているのも、『源氏物語』中で未摘花が滑稽化される例に通じていよう。『紫式部日記』に一例ある「そぞろごと」は、

そぞろごとにつれづれをばなくさめつつ、（同・四五頁）

とあり、ここでは自分を語っている。つまり、日記中では、他人に関する記述において「すずろ」が用いられており、「そぞろ」が用いられている時には、紫式部自身が関わっているのである。

『角川古語大辞典』のいう「微妙に異なる」点は、日記においては紫式部自身が関わっているか否かに読み取れようし、物語においては「すずろはし」二例が「そぞろ寒し」に通じるものの、「そぞろごと」の例はなく、「そぞろ」系の語は「そぞろ寒し」「そぞろ寒けなり」のみであることからうかがえよう。

いずれにせよ、「そぞろ寒し」が本人の意識を離れて感じられるとすれば、感じさせる主体は別のところにある、ということになろう。自らが主體的に感じる感覚ではなく、神か自然か、人間の力を超えた何かに突き動かされて、否応なしに感じさせられるというニュアンスが「そぞろ」に込められていることを確認しておきたい。

### 三 宿木巻の「そぞろ寒し」

宇治十帖の一例は、宿木巻の匂宮について語った中に見られる。

誰かは、何ごとをも後見かしづききこゆる人のあらむ。宮は、おろかならぬ御心さしのほどにて、よろづをいかでと思しおきてたれど、こまかなる内々のことまではいかがは思し寄らむ。

限りもなく人にのみかしづかれてならはせたまへれば、世の中うちあはずさびしきこと、いかなるものとも知りたまはぬ、こわりなり。艶に、そぞろ寒く花の露をもてあそびて世は過ぐすべきものと思したるほどよりは、思す人のためなれば、おのづから、をりふしにつけつつ、まめやかなる事までもあつかひ知らせたまふこそ、あり難くめづらかなる事なめれば、「いでや」など、譏らはしげに聞こゆる御乳母などもありけり。

(五一四二九頁)

傍線部イの解釈について、小学館『日本古典文学全集』他の頭注には、『玉の小櫛』の説が挙げられている。

わづかに花の露をもてあそび給ふほどの事をだに、そぞろ寒きやうにおぼすよしにて、貴人の、手いたきわざを、むげにしり給はぬことをいへる也。えんにとよみ切りて、そぞろさむく花の露をとつゞけて心得べし、

(『本居宣長全集』第四卷、筑摩書房)

ところで、この宿木巻の「そぞろ寒し」についての先行研究として、

田中仁氏の論がある。田中氏は、「そぞろ寒し」と感じられる原因には、心理的なものと生理的なものがあるが、従来の説は心理的原因からの解釈にとどまっており、生理的原因について言及されていないことを指摘されている。生理的原因を記したものととして宿木巻の宣長説を支持した上で、宣長説の、匂宮が貴人であるがゆえに露よりも冷たいものに触れたことがないとする部分について反証し、「秋の花の露」を匂宮の飽きにあつた女の涙であると解釈され、帯木巻の雨夜の品定めにおける左馬頭の詞、

御心のままに折らば落ちぬべき萩の露、拾はば消えなんと見ゆる玉笹の上の霞などの、艶にあえかなるすきずきしさのみこそをかしく思さるらめ、

(一一一五六頁)

を引いて、

「萩の露」とは、帯木巻の場合、男の手がのびてくるのを待ち受けている女である。「花の露」もこれとおなじような女ではないか。

と結ばれている。

田中氏が従来の説を整理され、辞書類の記述をあげて、寒さのために生じるといふ生理的原因を加えられたことは、その通りであると思う。ただ、氏が「特に寒さを表す語句はない」とされた葵巻には場面の冒頭に「をり知り顔なる時雨うちそそきて、木の葉さそふ風あわただしい吹きはらひたるに」とある。また、心理的原因とされた中で、帯木巻の「けしきばめるあたり」の味気ない応対」とある

が、むしろ、雲の降る今夜、一人寝では女も「そぞろ寒い」のでは、と推測していると解釈する方が文意が通るように思われる。

「秋の花の露」に関しては、解釈が異なるので、私見を示したい。

まず、『源氏物語』に二十例ある「もてあそび」（正篇十一例、続篇九例）は、二つに大別できる。一つは「花、月、雪」に代表される、風流なものをめぐる、といった意味での語であり、もう一つは、子供をなぐさめにする際の語である。前者は、特に誰が、というよりは、その場に居合わせた人々が揃って鑑賞しているさまである。それに対して後者は、紫上や雲井雁の場合など、男君への嫉妬心を抱えながら、子供の相手をして気をそらせるポーズとなっている。八宮の場合は、北の方を亡くし、厭世感から、

御念誦の隙々には、この君たちをもてあそび、

（橘姫・五十一―一二三頁）

というものである。気にかかる事がある時に、それに気付かぬふりを装って子供の相手をする、という例が多い。

次に、『源氏物語』にもう一例見られる若菜下巻の「花の露」は、田中氏の言われるとおり秋の季節のものである。しかし、ここで論じられているのは、音楽を演奏するのに、春と秋とではどちらがよいか、ということであり、ここでは、一貫して音楽理論が繰り広げられている。この論争の「花の露」は、女性を連想させるものではなく、あくまで一般的な秋の風景のようである。ちなみに、詩歌では「秋」は「飽き」の掛け詞である場合が多いが、『源氏物語』において

は、むしろ「秋」に「飽き」をかけることは避けられている。たとえば、「正篇における「秋風」は、死などによる永遠の別れや孤独を描く場面の風景となっているのである。<sup>7)</sup>

\*

\*

では、宿木巻の「そぞろ寒し」はどう解釈すればいいのだろうか。宿木巻の「艶に、そぞろ寒く花の露をもてあそびて」の状況に最も近い「もてあそび」の例は、総角巻のものではないだろうか。これは、

「何とはなくて、ただかやうに月をも花をも、同じ心にも遊び、はかなき世のありさまを聞こえあはせてなむ過ぐさまほしき」  
（五―二七―二二八頁）

という、薫の大君への台詞の中に見られる。薫が無常感を抱いているのは、自らの出生に疑惑を持ったためであり、薫の生活は、匂宮同様、花鳥風月を愛する、貴族的な余裕のあるものであることに違いはない。八宮の凋落にともなって、つましい暮らしをしてきた大君達から見れば、まばゆいばかりの生活であつたはずである。

以上、「もてあそび」「花の露」の二件についてまとめ考察すると、次のようになる。「艶に」以下は、風流を解し、行事を大事として過ぐす、優雅な生活の有様を象徴した文章なのである。そういう生活を可能としているのは、匂宮の身分の高さである。ここでは、露より冷たいものに触れたことがあるかないか、ということが問題なのではなく、匂宮の貴人としての立場上、世間一般の苦勞などは知り得ない、ということが取り沙汰されている、と解釈すべきである



と考えられる。

\*

正篇の「そぞろ寒し」が具体的な状況を有した場面で用いられていたのに対し、宇治十帖に一例のみの宿木巻の例は、匂宮について論じた中にあるので、明解な答えを引き出せるかどうかかわからないが、これまでの検討により明らかになったことをまとめてみたい。

まず、「花の露をもてあそびて」は、「もてあそび」についての箇所  
で述べたように、「花の露」を風流なものとしてめでる、ということ  
である。「艶」は、「もてあそび」を修飾していると考えてよからう。  
ところで、薫と匂宮との比較がなされているこの場面には、先に  
引用した匂宮への言及(傍線部ア)に対応する、薫への言及がある。

この君しもぞ、宮に劣りきこえたまはず、さまことにかしづき

たてられて、かたはなるまで心おごりもし、世を思ひ澄まして、

あてなる心ばへはこよなけれど、故親王の御山住みを見そめた  
まひしよりぞ、さびしき所のあはれさはさまことなりけり、と  
心苦しく思われて、なべての世をも思ひめぐらし、深き情をも  
ならひたまひにける。(宿木・五―四三〇―四三一頁)

「誰かは、何(こと)をも後見かしづききこゆる人のあらむ」という冒頭  
を受け、薫が中君の世話をするようになった理由を説明している。

傍線部が匂宮との対応箇所<sup>ア</sup>に当たる。匂宮が「世の中うちあはずさ  
びしきこと」がどのようなものであるか知らず、人生を「艶にそぞ  
ろ寒く花の露をもてあそびて」過(こ)すものと思っているように、か

\*

つては薫も、匂宮に劣らず大事に世話をされ、そのために高慢な心  
を持つていたのだ。ここには、恵まれた境遇と、そのために持たれ  
る人生観とが二人に共通するものとして語られている。つまり、二  
人の身分の高さが問題にされているわけである。おそらく、正篇の  
「そぞろ寒し」が、後半、行事の際に用いられるようになっていった  
ことから、宿木巻のこの例も、風流な行事の際に感じられる「そぞ  
ろ寒し」であろうと思う。源氏の子孫ということで、生まれた時か  
ら恵まれている匂宮は、すでに将来を約束された者として物語中に  
存在している。諸行事の際には、匂宮の華々しさが讃えられるであ  
らう。「そぞろ寒し」はそのことを暗示しているのではないだろうか。

#### おわりに

正篇における「そぞろ寒し」は、主にケの日に対する、ハレの日、  
非日常の場面描写において用いられていた。すなわち「そぞろ寒し」  
は、主に、源氏の素晴らしさや繁栄につながっていくものであり、  
源氏が神々しく輝いて見える、それを畏れに似た気持ちを抱いて見  
ている人々に感じられる感覚となっている。須磨巻で源氏自身に感  
じられる場合でも、源氏は桐壺院の姿が浮かび上がってきた事に感  
慨を覚えたが、結果として、桐壺院は、朱雀帝の夢に現れ、源氏を  
都に召還させるきっかけとなった。「そぞろ寒し」は、源氏の後ろに  
守り神がついているかのような、否、源氏自身が神であるかのような  
錯覚を人々が起こすほどの、ぞくぞくする感覚の現れなのである。

先に確認したように、「そぞろ」に込められたニュアンスを吟味すれば、「そぞろ寒し」は、人々が能動的に感じるものではなく、受動的に感じさせられる感覚であることも忘れてはならない。

源氏は、青海波を舞い、人々に「そぞろ寒し」という感動を与えたその夜、正三位に加階した。初音巻で男路歌の行列が内裏、朱雀院に続いて六条院へ向かったことは、須磨からの召還後、見事に復活し、以前にも増して勢いづいていく源氏が、もはやなくてはならない重要な人物として存在していることを顕著に示していた。そして、住吉参詣は、明石入道の遺言を受けて盛大に催された。冷泉帝の退位にもなつて、明石女御の第一皇子が春宮になつていたこの時、源氏の繁榮は頂点に達し、子孫へと受け継がれていくことが約束されていく。「そぞろ寒し」という感覚は、行事の中でも、源氏が権力を得、最高に輝く場面において、榮華を味わい、感動に震える人々によつて確認されていることになる。住吉参詣の後、紫上発病と柏木・女三宮密通事件によつて源氏の内面世界は崩れていくことになるが、世間的には、密通の事実は漏れることなく、源氏の体面は傷ついていない。明石女御はやがて、中宮となる。匂宮はいまをときめく天皇家の皇子なのである。

「そぞろ寒し」が引き出されるのは、「露」に濡れるためである。優雅な生活が許されるのは、源氏が築いた榮光のおかげであり、匂宮には源氏の榮き上げた地位を引き継ぐ者として「そぞろ寒し」を感じることのできる資格が与えられているのではないか。つまり、露に

濡れ、感極まつて、ぞくぞくするという従來の説に加え、宿木巻の「そぞろ寒し」には、匂宮の背後にある榮光が象徴されているという解釈を重ね合わせることも可能なのである。

〔注〕

(1) 石田稷二氏「源氏物語における聴覚的印象」(『国語と国文学』昭24・12)、「源氏物語の情景描写」(『源氏物語講座』

第七巻 昭46 有精堂)、飯沼清子氏「源氏物語」の嗅覚心

性」(『王朝文学史稿』4・5 昭52・9)、榎本正純氏「源氏

物語における感覚の問題」(『解釈』昭52・9)、釜我憲治氏

「源氏物語の(視線)と(自然)の構造」(『成城国文』15

昭56・11)、「物語研究 第二集——特集・視線」(昭63 新

時代社)、松井健児氏「源氏物語」の蹴鞠の庭——六条院東

南の空間と柏木」(『論集平安文学』平6 勉誠社)、吉井美弥

子氏「物語の『声』と『身体』——薫と宇治の女たち」(『音

声文化学』越境1 王朝の性と身体』平8 森話社)、三田村

雅子氏「源氏物語 感覚の論理」(平8 有精堂)など。

(2) 題目に寒暖の感覚が示してあるものには、中川浩文氏「源氏物語の「すずし」などについて——その意味の推移と表現における把握——」(『女子大国文』(京都女子大) 昭41・3)、

田中仁氏「そぞろ寒く」と「花の露」と——『源氏物語』宿木巻

——」(『芸文東海』15 平2・6)がある。

(3) 山田利博氏「源氏物語における男路歌——その対照的方法に

ついて——」(『源氏物語の視界』4 平9 新典社)には、

「ここで「水駅」であるにも拘わらず規定以上のことを示したのはこの時点では六条院にそれだけの力があつたことを示すと理解でき(中略)男路歌はそれが展開された家の力を象徴する」とある。但し、山田氏は「六条院が水駅となり得たのも実はその場に玉鬘の存在があつたがためであり、それを失つた真木柱巻では六条院が水駅となることは不可能であつた」とされるように、玉鬘を中心に男路歌を捉えておられ、真木柱巻での水駅が髭黒邸に移つたことで「源氏にはこの先繁栄があり得ないことが示される」とされている。「繁栄」をどう解釈するかということも問題になつてこようが、源氏がやがて准太上天皇となることをふまえると、水駅の移動はむしろ、もはや、水駅を引き受けるレベルを超えたところに源氏が位置するためである、と考へられるのではないだろうか。

(4) 「そぞろ寒げなり」は若紫巻に一例のみあり、御帳に入つてきた源氏に対して、若紫に感じられる感覚となつている。場面冒頭に「霰降り荒れて、すぎぎ夜のさまなり」(一一三—一八頁)とあり、「霰」と「すぎぎ」が存する点において「そぞろ寒し」の場合と共通している。

(5) 注(2) 前掲論文。

(6) 「新日本古典文学大系」にも、宿木巻の注に、帚木巻のこの箇

所が引用してある。

(7) 『源氏物語』における「秋風」に「飽き」が掛けられていないこ

とについては、上坂信男氏「秋風の譜」(『源氏物語——その

心象序説』笠間選書10 昭59・5 笠間書院)、馬場婦久子氏

「源氏物語の和歌表現——その位置、秋風「鐘の声」を中心に

——」(『女子大文学 国文編』第31号 昭55・3)などに指

摘がある。

——あいはら・さやか、広島大学大学院博士課程後期在学——